

北地域後援会は我孫子1~4・久寺家・台田・つくし野・並木・根戸・布施のエリア



しらかば北

発行責任者
井上文夫

星野市政の問題点を考える

星野市長はこの1月、無投票当選で5期目に入りました。過去、20年の星野市政が市民の皆さんから高く評価されての5選でしょうか。そうではないと思います。

確かに汚職や業者との癒着などが問題になったことはありませんでしたが、我孫子市は活気のない街になってしまっているように思います。その大きな原因は人口の減少です。星野市長が就任した2006年には13万4千人でしたが、14年後の2020年では13万2千人と2千人も減少しています。



近隣の市と比べて見ると同じ年の比較では柏市は4万7千人増、松戸市は2万7千人増、流山市は4万4千人増、野田市は1千人増と、東葛5市の中で我孫子市だけが減少しています。このことが過去20年間の星野市政の最大の問題点だと思います。

原因はどこにあるのでしょうか。あるメディアの調査では、我孫子市に引っ越してきた理由として「交通の利便性が良い」があり、反対に我孫子市から引っ越した理由としては「交通が不便だから」が上げられています。

「交通の利便性が良いので引っ越してきた」と答えた人は我孫子駅周辺の西側地域、「交通が不便だから引っ越した」と答えた人は成田線沿線の東側地域でした。このことから、我孫子市の発展は東側地域の発展がカギを握っているといえるでしょう。

星野市長は5選にあたっての公約の一つに「天王台駅・布佐駅間バス路線の新規運行」を掲げていますが、聞くところによるとバス会社が「採算が合わない」ということで、公約が早くも暗礁に乗り上げている有様です。

これまで、成田線沿線の東側地域の発展のためには交通の利便性をどのようにするのか、十分な検討と実行がなされなかったことが人口減の大きな要因です。

これに関連することですが、我孫子市は東側の児童数減少に伴って布佐小と布佐南小ならびに布佐中の統廃合を計画しています。これでは通学が不便になる生徒が増えるため、人口減にさらに拍車がかかるのではないのでしょうか。

「生徒数の減少は質の高い教育のチャンス」ととらえて魅力ある学校作りと、東側地域の自然豊かな特色を生かした環境作りによって、若い人たちや壮年者呼び込むことが必要ではないのでしょうか。

また、公園坂通りの整備計画は2008年に「公園坂通り整備に向けた調査検討報告書」が作成されてから、約14年が経っていますが未だ完成していません。

このように星野市政には将来にわたる具体的なビジョンも、「決断と実行」もありません。

私たち市民は星野市政を監視し、要求と声をぶつけて「決断と実行」を迫っていきましょう。
(井上文夫)



すこっぷ三味線を演じる友の会有志の皆さん



理学療法士 稲垣 智治 さん

1月21日、台田青年館で「転ばない歩き方」講座を、あびこ医療と健康友の会が開催しました。会場に溢れるほどの人が集まりました。

日ごろ、障害になるような物が何もないところで、つまづいたりしたことは多くの人が経験していることでしょう。高齢者が関心のある話でした。

講座が始まる前に友の会有志の方が、趣向を凝らした衣装で賑やかに「花笠音頭」を踊ったり独創的な「すこっぷ三味線」を奏でたり楽しい会場でした。

講座は、理学療法士稲垣智治さんの「転ばない歩き方」で、転倒を予防するため、どんな注意をすればよいか、日頃の運動はどうするかなどについて丁寧な分かりやすい話でした。(江)

花火

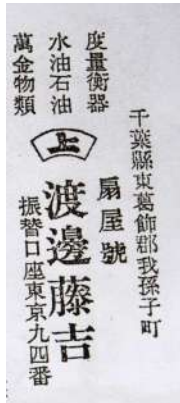
つくし野2丁目の住宅街に、カチカチと毎晩のよう聞こえる夜回りの音。防犯パトロール隊が2丁

目の約200世帯を回っていると聞いて夜回りを訪ねた。この日、4人が揃って反射テープが付いた防犯用のチョッキを着て1人が拍子木を打って回っていた。土日を除く毎週5日間(そのうち2日は車で)実施している▼驚くことに15、16年前から続けているこの街の夜回りのリーダーは80歳になる婦人で今でも必ず参加しており、県の防犯協会から表彰されたという▼犯罪者が最も恐れるのは、かかわる地域の目と音だと言う。夜回りは犯罪予防に効果があるのは間違いない▼江戸時代、大規模な火事が頻発したため夜回りは火災防止の目的で「火の用心」の声掛けと拍子木の音が主役だった▼「火の用心」この言葉を最初に使ったのは徳川家康の家臣本多作左衛門が1575年「長篠の戦い」で妻に向けた手紙に「一筆啓上火の用心お仙泣かすな馬肥やせ」と書いたのが初めと言われている▼夜回りの声は、1943〜4年頃の戦時下、昼間米軍機の爆音に不安だった夜でも、その夜拍子木の音を聞いて安心した事を覚えている▼夜回りは地域のかかわりを大切にしている400年以上続いている暮らしを守る知恵であらう。(江)

第二代我孫子市長

渡辺藤正さんのこと(上)

昭和45(1970)年我孫子に市制が布かれた。そして翌46年市長選挙が行われ、渡辺藤正さんが市長に当選した。初代鈴木市長は我孫子町長からの引き継ぎ市長で、わずか1年の在任期間。市制後初の市長選挙で渡辺藤正さんが当選したので、藤正さん(以下 藤正さん)が実質的には初代我孫子市長だと言つてよい。その後連続4期市長を務め、スタートした我孫子市政の骨格をつくつた。



藤正さんは大正2(1913)年、右に示した扇屋という屋号の金物、食用油・石油商の家に生まれた。

昭和13(1938)年慶應義塾大学を卒業。昭和38年我孫子町会議員になる。

市長に就任すると『広報 あびこ』に2年間、毎号「よびかけ」というタイトルでエッセイを書いた。

藤正さんの考え方を知らぬに好都合のエッセイなので、そこに書かれた文章を紹介する(引用する文章の『広報 あびこ』掲載号数などは省略)。

エッセイ「よびかけ」の1回分は約600字、「よびかけ」というタイトルからも察しがつくように、我孫子市の課題、当面する政策を市民に率直に語りかけている点に特徴がある。

インターネットより



「市長への手紙」という制度をつくり、600通に上る市民からの意見、提案をもらって、「市民福祉」こそが行政すべての

基本」ということを学び、そうして実際、「市民サービス課」を設置した。

また「義務教育費を、最終的にはすべて国が一元的に負担すべきだ」として憲法に基づいて等しく教育を受ける権利について語っている。

老人福祉については「老後の平和と幸せを守り、そのために、あらゆる努力を傾注することこそ、行政の大きな責任である」と思う」と述べている。

さらに「平和への祈り」と題して、「おとなには、戦争とは何であつたか、をつかみだす義務と、戦争を知らぬ世代に真実を伝える責任がある」と主張する。「つかみだす義務」という表現には藤正さんの強い意志が込められているように思う。

自然環境の保全にも関心が深く、目標とした自然と調和のとれた都市造りは「人間の本源的な要求」であると言っている。そしてこのような市政の課題に付随する財政問題については次のように言う。

昭和46年度の財政について、国民の納税額のうち国が67%、府県が17%、そして市町村への配分が15%だと数字を示して、市民生活を直接支える市町村税は国民に課す税の40%を配分すべきだと主張している。

二代市長渡辺藤正さんの考え方を紹介した。

(竹)

紹介します

井上文夫著 『曙光へ テイクオフ』 (新日本出版社)

あびこ北地域後援会長 井上文夫さんが『しんぶん赤旗』に連載した力作『曙光へ テイクオフ』が1冊の本になりました。「あの空に戻るまで 絶対に諦めない!」 N航空パイロットの北藤徹は、人間の尊厳をかけ、解雇撤回を求めて仲間とともに闘った。



新聞連載中に読んだ皆さん、まだ読んでない皆さん、1冊にまとめられたこの本を手にして、その感動を味わって下さい。(注文は 090-3193-0601 井上まで) (税別 1800円)

この人に聞く 中島喜美枝さん(2)



若かりし頃の中島さん

(前号より続く) 60年の安保闘争では、文化人・知識人が参加していた「安保批判の会」にも関わり、すでに妊娠していたが、6月15日の大抗議集会にも参加していた。

24歳で長男出産。当時練馬で、民主婦人連誦準備会として活動し、1962年の新日本婦人の会(新婦人)の結成大会では事務局員として参加した。練馬区には有名文化人の夫人や戦前から活動をしてきた優れた女性など大勢いる中で、ただ一人20代の中島さんが若さを買われていたのだと話した。丸木俊さん(「原爆の図」作者)の広いアトリエを借りての会議の時、いわさきちひろさんは優しく、中島さんの地域の友人や画家仲間を紹介してくれたそうです。63年に次男誕生。この頃まで自宅で英文タイプの仕事をしていたが、高田馬場で小さな事務所を借りて和文タイプの印刷会社を始めた。安保闘争後にできた大学の教職員組合の仕事が主だったが、仕事も増えて3男誕生の機に住まいも高田馬場に移し、事務所も駅前の大きなビルに移り、とにかく仕事が増えて多忙な日々を過ごした。

夫が友人と高田馬場で「十一時館」という、うたごえのお店を始めて経営には無関係だったが楽しくもあつた。3年ほどで潰れた。煽りをつくって中島さんも会社を閉じた。その後離婚。43歳で再婚し中島姓となる。44歳でさやかさん(声楽家)を生んだ。会社務めの時に宅地建物取引主任者の資格を取ったそうだ。49歳の時(1985年)我孫子市に引越した。

我孫子に来てから根戸小学校のPTA 副会長や新婦人の活動をしてきた。中島さんの話は多岐にわたり興味深い話が多かった。

(中島さんの項終わり)